

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

花立三郎・杉井六郎・和田守編

『同志社徳富蘇峰資料集』

(三一書房、B5版)
(九一二頁、二五〇〇円)

徳富蘇峰の青年時代、修学・思想形成期ともいえる明治十一年から同二〇年までの直接資料が、十年間の調査・収集・編集・校訂作業の結果、B5版、本文9ポ、二段組九一二ページ、一二〇点を収録する大々な資料集として、昨年十月、三一書房から出版された。編集者の一人は本学人文科学研究所の杉井六郎教授である。杉井教授は

長年の蘇峰研究業績を一昨年『徳富蘇峰の研究』と題して公刊された蘇峰研究の第一人者で、『資料集』の最適の編集・校訂・解説者である。

今まで蘇峰の青年期は、『蘇峰自伝』等の二次資料を通してしか知ることができず、明治九年の秋から同十三年五月までの同志社英学校在学中の蘇峰については資料不足で、研究が困難であった。『資料集』はその不足を補って余りあるもので、彼の精神発達の跡を迎るに好資料である日記、感懐、反省メモ、漢詩や新聞記事の手写録、演説草稿、名言名文の抜書等が年代順に収録されている。これらの資料を用いることによって、例えば彼の初期のキリスト教信仰を具体的に知ることができるようになった。

蘇峰は熊本洋学校在学中にジェーンズによってキリスト教に開眼され、明治九年一月の花岡山での「奉教趣意書」に署名した一人である。それは「陣笠の一人として」「附和雷同」(蘇峰自伝 六四ページ)した程度のものであったが、この年の十二月には、新島から受洗するまでに彼の信仰が深

まっている。彼は「謂はゞキリストを信ずると云ふよりも、新島先生を信ずると云ふことで、キリストを経由して、神に近付くと云ふよりも、新島先生を経由して、神に近付くと云ふ事であった。」(同上八六ページ)と述べているが、彼の十四才のときの受洗が新島に対する信頼・尊敬の念からであったとしても、その後の蘇峰はキリスト者としての敬虔な生活を送っていることが、収録された「朝夕工課」によってうかがえる。これは彼の朝夕の祈禱の言葉を克明に記録した小冊子であるが、例えば明治十一年七月二七日早朝の祈禱は「在天之父ヨ、願くハ私ヲして阿那多之前ニ祈ルコト之出来ル様ニナシ給へ、何卒御慈愛ニヨリ我之罪過ヲ許シ給へ、何卒々々温ナル心ヲ持チ、量ヲ大ニシテ大事ニ堪ル丈之果敢勇氣ヲ与へ給へ。」といった調子である。

蘇峰の在学中に起った新島の自責の杖事件(明治十三年四月十三日)については「処々秋光」で述べている。それは「今回校長ノ処置ハ之レヲ不当ナルトスルカ、二年生徒ハ同志社ノ謀反人トス可キヤ」という書き出しで、「吾輩ノ考ニテハ、今回ノ事ハ

二年生徒ニ取りテハ大出来ニシテ、我輩傍
觀者ニ於テモ面目不遇之ト考フルナリ、：
：実ニ正々ノ旗、堂々ノ陣、敬服スルニモ
猶余リアリト云フ可シ」と二年生の行為を
称賛し、新島の行為に対しても「諸人ノ尤
モ注目スル処ロト雖モ、吾輩ニ於テハ尤モ
此ノ英断ニ敬服スルナリ」と述べて、その
処置を評価し、煽動者的役割を果たした彼
の微妙な立場を示している。

同志社は新島の自責の杖事件を新島の真
骨頂として、彼の全人格を吐露したもの
として受けとめてきた。故大塚節治博士には
この事件をニュー・イングランド神学の立
場から解釈された論文がある（新島先生の信
仰の背景をなす新英州神学について「新島研究」
三五号）。また杉井教授は蘇峰研究家の立場
から、前述の著書の中で克明に分析検討を
加えられている。新島襄の最もよき理解者
であった徳富蘇峰のキリスト教、及び同志
社にとって極めて重大な意味をもつ自責の
杖事件を、この新しい直接資料を用いるこ
とによって、同志社の多くの人々が各々の
立場から解明され、議論されることを期待
してやまない。（井上勝也・大学文学部教授）

笹野 貞子著

『女性の幸福と憲法』

（法律文化社、四六版）
（二九〇頁、一、七〇〇円）

本書は、全篇を通して、女性の生き方を
探り、人間としての女性が確立されるため
に何が必要であるかを、女性の置かれてい
る社会的実態の分析を通してえぐり出し、
明るい展望を与えている。しかも本書が類
書と一味違うところは、法学者であると同
時に実践家でもある氏の眼を通して書かれ
ているため、いわゆる抽象的・精神的女性
論でない点にある。

本書の構成は、Ⅰ、女性の歴史、Ⅱ、憲
法を学ぼう、Ⅲ、すばらしい結婚と家庭生
活、Ⅳ、たくましく、やさしい女性達の保
護の四章から構成されている。Ⅳ章は、過
去何回にもわたり訪ソし、見分を豊にした
確かな眼で、現在のソビエト婦人の人権の
実態を要領よく分析し、紹介している。社
会体制が異っても、婦人の人権が護られて

いるか否かが、当該社会のレベルを示すの
ではないかという著者の問題意識が髣髴と
して迫ってくる。

本書の第一の特色は、歴史的に女性の
人権を考察し、展望を与えようとする社会科
学的手法をもってなされているところにあ
る。社会科学的視野をもたない女性論は、
有害無益だからである。

第二に、「憲法を学ぼう」の章が収めら
れているのはさすがである。憲法論をドロ
ップさせた人権論Ⅱ女性論は、おしろいの
如き女性論でしかないであろう。女性の
人権も、人間としての権利以外のものではな
く、この点で国の最高法規である憲法が、
いかに諸種の人権を保障しているかを検討
することは重要である。氏は、旧、現憲法
下の女性の人権を比較し、現在日本の女性
の人権論確立に迫ろうとしている、そし
て、日本国憲法の最大の歴史的性格でもあ
る恒久平和主義の尊さに着眼し、「平和な
くして人権なし」、「平和なくして女性の
人権なし」の命題を確立しようと努めてい
る。確かに、核時代の今日ほど、平和を人
類の最高善として追求しなければならぬ

時代はない。

第三に、人間の一生は、生れ、成長し、結婚し、老いるものであるが、この人生のサイクル全体を通して、自由、人權が、政治的にも、社会的にも十二分に保障されなければならぬ。人間が社会生活をする基礎的単位は、結婚と家庭である。しかも女性に対する人權差別の大半は、この結婚とこれに続く家庭生活に直接間接かかわってなされてきた。戦前の家族制度を考えてみただけでもこのことは一目瞭然である。

氏の人権体系論のウエイトは、したがって個人の尊厳と両性の本質的平等の原則を定めている憲法二四条に置かれている。この点、憲法二四条を含めた社会権、生活権に関する氏の体系論は、わが学界の通説を克服するものとして評価したい。世界人權宣言一六条もまたこの点を確認し、強調しているのである。

「屍を越えて人類の幸せを求めて進む人間の姿を、憲法を学ぶことよって」理解しようとする氏の問題意識は、全ての女性に共通のものとされなければならないであろう。私は、人間の権利、女性の権利を少

しでも考えようとする多くの方々に、本書の一読を心から推奨する次第である。

(上田勝美・龍谷大学教授)

田中 真人著

『高島素之一日本の国家社会主義』

(現代評論社、B6版
三四五頁、二、〇〇〇円)

同志社の生んだ思想家たちのなかには中途退学者が少くない。中退の理由には反抗的精神も含まれているだろう。高島素之もその一人である。

本書によれば新島襄没後十四年をへて同志社神学校に入学した高島は「学生一般新島時代を追思するはよけれど、イツ迄も新島々々で、絶え間なく潮流する時代の思想に違」と批判し、キリスト教を棄てて社会主義に向かう。その棄教には「キリスト教と社会主義が同一の次元にあるのではなく、前者は後者の活力たり得るとともに、後者を必然化する理論を前者は持たな

い、ないしは持ちえなくともよい」という論理があると著者は評価する。

の高島が新聞紙条例違反で下獄する際に安中教会の牧師柏木義円が英文の『資本論』を差入れ、それが日本最初の『資本論』完訳の機縁となったという挿話も紹介されている。そして書齋の座布団の下の畳を腐らせてしまうほどの苦心の訳業は今日から見てもかなりのものだという。

高島といえばキリスト教から社会主義、そして国家主義へと、転向思想の典型のようになっているかも知れないが、本書によれば「高島は終始マルクス主義であることを自認しつつ、その『誤れる点を熱心に強調』した」人であり、高島自身も「マルクスの不滅性」と題する文章に「マルクスの偉いところは、たとひ彼れの学説の全部が時間で腐らされても、時間の力ではどうにもすることの出来ないある種の生命を握んであるところにあるのだ」と記しているという。

だから著者は高島を「非『非マルクス主義者』と定義する。といつてもこの本は高島を積極的に評価するために著わされた

のではない。高島の死んだ昭和初年から今日に至るまでの日本の社会主義思想と運動のなかに「高島理論は、なお克服すべき対象として生き続けている」という。高島には、国家の滅亡を唱えながら権力や独裁を説くマルクス主義の矛盾を衝き、むしろ無政府主義に共鳴しつつも、その樂觀論を性悪説によって警め、結局は帝国主義に陥っていくところがあつたからである。

今日、社会主義の多様化のなかで国家社会主義もまた再点検されつつあり、とくに北一輝のようなロマン主義的な人物への関心は高い。しかし北にはいささか過剰な心情性があり、それに対して高島の理論は比較的にいえば毒をもって毒を制する作用をもつだろう。その意味で、この「忘れられた思想家」ともいふべき人物の実証的かつ思想的な評伝が、現在に至る社会主義の思想と運動の潮流をともなつて著わされたことは時宜を得たものといわねばならぬ。

およそ同志社にとって高島は鬼子であつたかも知れないが、それをも包括するところに同志社の「自由」があるはずである。

(笠原芳光・京都大学教授)

同志社関係出版物

新島 襄 (岡本清一著)	同志社大学出版部	五〇〇円
新島 襄 (魚木忠一著)	〃	三〇〇円
新島襄の生涯 (北垣宗治訳)	小 学 館	八五〇円
回顧七十七年 (大塚節治著)	同 朋 舎	六〇〇円
髪 の 掠奪 (岩崎泰男訳)	同志社大学出版部	一、〇〇〇円
同志社歳時記 (生島吉造・松井全編)	〃	六〇〇円
〃 (統)	〃	七〇〇円
同志社設立の始末 (新島襄)	学校法人同志社	一〇〇円
同志社大学設立の旨意	〃	三、〇〇〇円
同志社九十年小史 (社史々料編集所編)	〃	五〇〇円
同志社歌集	〃	二一〇円
新島襄書簡集 (編者代表・住谷悦治)	岩 波 書 店	〃
同志社で話したこと書いたこと	洛 北 書 房	七五〇円
(久永省一著)		
写真集「同志社一〇〇年」(学校法人同志社)		
豪華上製本 (二二、〇〇〇円)・並製本 (九、〇〇〇円)		
写真集「同志社―その一〇〇年のあゆみ」(学校法人同志社)		
上製本 (二、二〇〇円)・並製本 (七〇〇円)		

— 送料は別 —

取 扱・同志社収益事業課